



オオカミの復活

浅野 純次

(経済倶楽部理事 長)

▼国立劇場10月公演で曲亭馬琴の「開幕驚奇復讐譚」を楽しみました。「開幕驚奇」とは開けてびっくりという、江戸時代の本のキャッチコピーのようなもので、南朝による北朝仇討ちにまつわる通し狂言です。菊五郎の仙女(吉野山の九六媛)と菊之助の姫(楠姑摩姫)が舞台左右からロープで客席後ろ後方へと飛び去る「両宙乗り」を演じたのは同劇場初めてのことと、やんやの喝采でした。姫の仇討ちを助ける仙女は白いオオカミにまたがって飛び去るので、江戸時代、オオカミは正義の味方だったことがうかがえます。

ば防げますが、すべての木に巻けるはずもありません。しかも鹿に木や草を荒らされて小動物が絶滅に瀕し、雷鳥やミツバチさえ激減していると聞いたことがあります。森の生態系、食物連鎖が崩壊しかかっているのです。さらに植生が壊れ裸地となった山からは土砂が流出して河川にも大きな影響が出ています。

▼鹿の数は増える一方で、北海道のエゾシカはこの10年間に6倍に増えて60万頭以上になったそうです。三重の大台ヶ原だけでも7万頭以上。多額の予算を使ってもいっそうに減らず、貴重な原生林が消滅しています。この夏、奥日光の西ノ湖に行ったときには至近まで鹿が寄ってきて怖がる気配も見せませんでした。可愛いといって女性が鹿とのツーショットを撮っていました。可愛いところが曲者で、オオカミも猟師もいない森で気ままに繁殖を続けているようです。

▼オオカミが絶滅した理由は毛皮や骨目当てに乱獲されたことのほか、「明治政府が文明開化にそぐわない

▼それと前後して聞く機会があった日本オオカミ協会会長、丸山直樹・東京農工大学名誉教授の話が面白かったので紹介しましょう。この協会はオオカミ復活運動を進めていて「オオカミ再導入によるオオカミの野生復帰」を目指す署名運動に取り組んでいます。欧州ではオオカミは保護されていて、アメリカでもイエローストーン公園はじめ再導入が盛んらしい。日本もシベリアと中国北部で捕獲して移植したいのだとか。

▼日本の森からオオカミがいなくなつて100年、今、大問題が発生しています。天敵がいなくなった山で鹿が大繁殖してしまつたのがそれで、芽を食べられてしまつて若木のみならず、成木でも表皮をむしり食べられて枯死する森が広がっているのです。

▼私の所属するNPO「百年の森づくりの会」でも秩父の山に植樹をしていますが、鹿の害とのいたちごっこです。ネットでカバーしたりしても、しょっちゅう破られています。成木の下部はフェンスを巻き付け

として駆除したことが大きい」と丸山さんは言っています。「赤頭巾ちゃん」とオオカミの話が国民に及ぼした影響も大きいとか。ほかにも「三匹の子豚」とか「ピーターと狼」とかイメージの悪い話ばかり思い浮かびます。日本の「送り狼」なんぞオオカミにとつてはたぶん迷惑な話で、古今東西、オオカミが人を殺したのはいくつとなくあります。

▼神道で崇拜されてきたオオカミ(そういえば秩父の三峰神社の祭神はオオカミでした)を明治政府は近代化路線から排除しようとしています。そこには人間上位の自然観もあつたわけですが、生物多様性の問題も含めて、東日本大震災のこの年、オオカミ復権から自然と人間の関係を考えてみるのも意義深いことではないか。自然の猛威に対してもそうですが、自然に対して畏敬の念を抱き、自然との共生を大事にしていくことで、世界に誇るべき日本固有の文化、ソフトパワーが確固たるものになつていくのだと思います。